

梓林太郎

鹿島槍ヶ岳殺人事件



徳間文庫



かしまやりがたけさつじんじけん
鹿島槍ヶ岳殺人事件

© Rintarô Azusa 1993

㊤ - 15 - 8

1993年1月15日 初刷

著者 梓^{あずさ} 林^{りん}太郎^{たろう}

発行者 徳^{とく}間^ま 康^{やす} 快^{よし}

発行所 東京都港区新橋四一〇七一〇五
株式会社 徳間書店

電話(〇三)三四三三・六二三一(大代)
振替 東京四一四四三九二番

印刷 凸版印刷株式会社
製本

〈編集担当〉 吉川和利

ISBN4-19-567415-8 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳間文庫

鹿島槍ヶ岳殺人事件

梓 林 太 郎



徳間書店

目次

第一章 蘇生 6

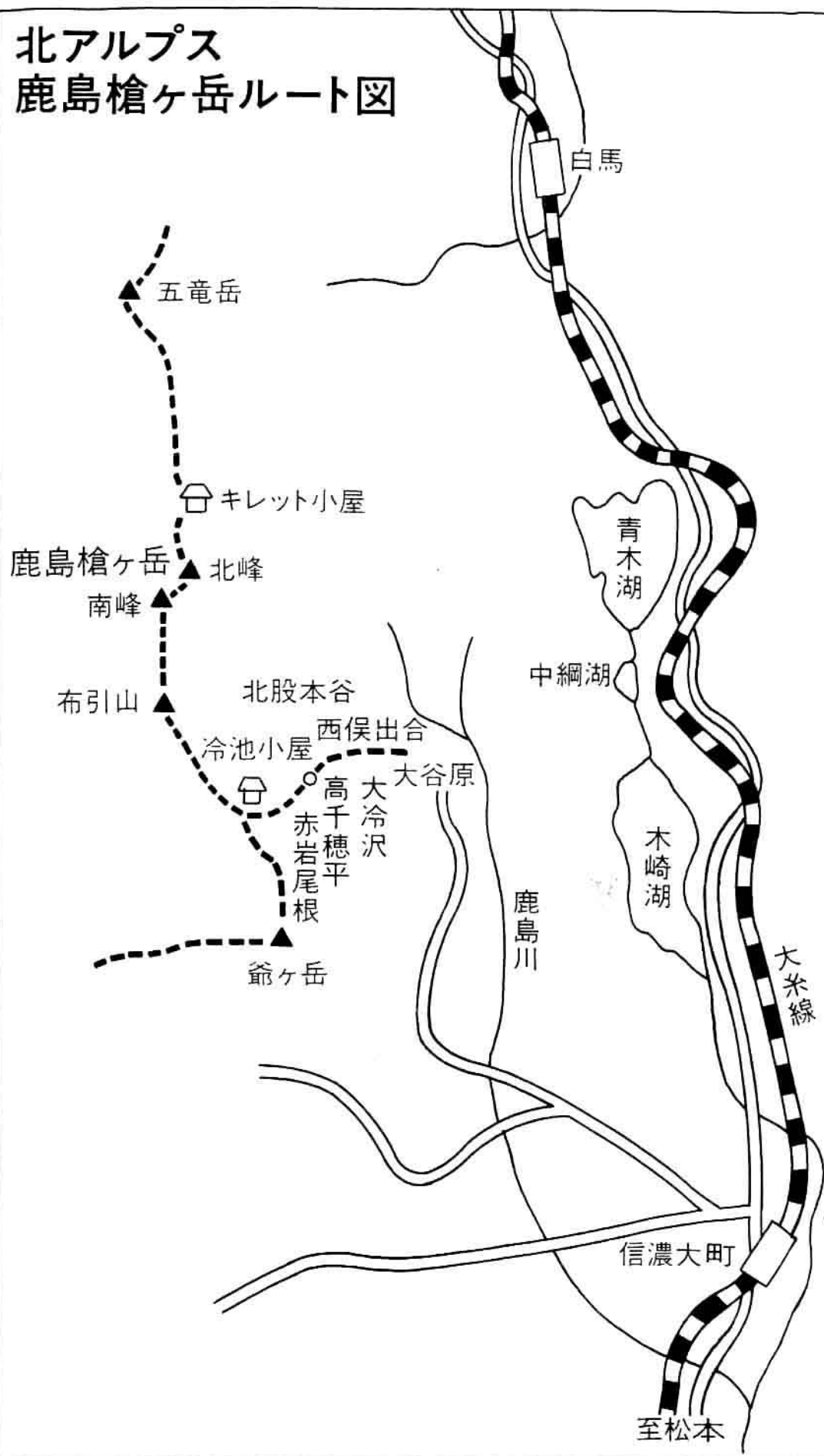
第二章 怪死 76

第三章 墳墓 158

第四章 慈善 224

解説 鴨下信一 279

北アルプス 鹿島槍ヶ岳ルート図



*

——鹿島槍ヶ岳東面は、四方の尾根に支えられ、ノミでえぐられたような深い谷を食い込ませている。赤茶けた頂稜直下は垂直の壁である。

その壁を這い昇った薄いガスが、稜線で黒部側からの風にあおられて飛び散った。尾根に登ると、周囲は赤褐色になった。奇怪な形の赤い岩がいたるところで径をふさいでいる。

見下ろす樹林帯には陽の明るさとは対照的に、主稜から派生した四本の尾根の皺波の濃い影が、複雑な模様を描いていた。緑の広がりの中に赤と黄の葉がちりばめられて、高価な綸子をみるようだった。

県境尾根は背を右にねじっていた。吊り尾根をはさんで左が南峰で、その手前の小さな突起の下に、ナタで削いだような黒い溝がある。

九月十三日の午後、そこへ人が墜落した。赤い荷物が宙に舞った——。

*

第一章 蘇生

腎臓移植

1

レースのカーテンを漉して入っていた風がやんだ。窓の目隠しに植えられているカラマツかシラカバの木で蟬が鳴いていた。

駒井麻也子は、ベッドに起き上がった。今年になって蟬の声をきくのは初めてだった。窓に影を映さぬように注意して、カーテンの端を摘まんだ。だが、室内でもものの動く気配を蟬は感じ取ってか、鳴きやんだ。

ベランダにゴムとシャクナゲの鉢を置いている。さっき掛けた水の露が葉面から一滴ずつ消えていく。ここ四年間というものの、彼女にとって透明な水の玉は、光り輝く宝石以上に高貴な

ものに思われた。自宅にいても、朝の庭で葉面の露を見つけると、それにそっと顔を映した。球形の露を唇に吸い取ったこともある。露はからだに染み込んで、血管の隅ずみまでを透明にするような気さえた。

カラマツの枝越しに青い山脈がある。北アルプスだ。やや右手のピラミッド形が常念岳じょうねんだけであるのを、麻也子はここへ入院して知った。

隣室で水音をたてていた母の知世ともよが、皿を持ってドアを開けた。ケーキの香りが近づいた。「三、四日はこういう物も食べられないそうだけど……」

母は、皿をテーブルに置いて、麻也子にフォークを持たせた。母の手の甲に水滴が付いていた。

麻也子は、ケーキよりもメロンを食べたかった。水分の多い物を摂ると、それだけからだの負担が重くなる。だからメロンやナシなどもう何年間か食べていない。

「先生は、順調にいけば、二週間ぐらいで普通の食事ができるようになるっていったわ」
麻也子は唇を舐めた。これが癖になってしまった。

「大丈夫よ。順調にいくわよ。いろいろ検査した結果、あなたにぴったりだというんだから」
「完全によくなるのかしら？」

麻也子は、ケーキの角を割った。

「何度同じことをいうの。完全な人を長友先生ながともが選んでくださったんじゃないの。二、三か月

で、あなたは普通の人と少しも変わらない健康なからだにもどるのよ」

母はいつてから、窓の外に視線を移した。

蟬が鳴き出した。母の首が夏の虫の声に向かってわずかに伸びた。白い喉元のどもとを横に通っている幾本かの条すじにたるみが目立ち始めていた。下目蓋まぶたにできた条も深くなっている。

「わたしに腎臓じんぞうを一つくださる人に、お母さまは会ったの？」

麻也子は二日前に母に尋ねた。母は首を横に振った。ドナーが誰かだれということは秘密なのだという。それは、被提供者にとってもドナーにとっても、事後に障害が生じない配慮だということだ。

「長友先生がさがしてくださった方なのよ」

長友というのは、東京の大林記念病院おおばやしの医師である。四年前、麻也子が腎不全で人工透析とうせき治療を始めた時からの担当医だ。

麻也子の腎機能が、正常な人間の五分の一になったのが四年前だった。腎機能が極端に衰えをみせた自覚症状は頻尿ひんにょうだった。特に夜間、五回から六回トイレに起きた。トイレを終えても残尿感は去らなかった。膀胱ぼうこうをいつも意識した。したがって熟睡できない。人が起き出す頃ころになって疲労を感じ、深い眠りに落ちるのだが、それは二時間ともたず、また尿意をもよおした。

起き上がると、時に目眩めまいを起こした。からだもだるく、トイレをすますとふたたびベッドに

倒れ込んだ。食事はまずく、体重は減った。だが顔は丸くなった。浮腫である。眼の周りが腫れ、眼縁は一重になった。足にも浮腫が出ていつも重かった。皮膚の張り艶は失せ、青黒い肌に変わった。体内に毒素がたまつたのだ。腎機能が衰えて、小水が出なくなった。十八歳の麻也子は、誰に対しても病気を隠すことができない面相になった。

腎機能は日増しに衰え、人工透析療法が必要になった。食事にも制限が加えられた。

人工透析治療は一回五時間ぐらいを要する。最初は入院して週二回透析を受けていたが、日常生活の指導を修得してから退院して、週三回透析治療に通院していた。

いつも水袋を抱えているようにからは重く、それに頭痛が加わった。目眩とともに吐き気がすることもあった。人工透析は腎機能のうち、糸球体の機能だけが代行されているに過ぎず、この治療にも限界のあることを彼女は知った。腎不全が末期を迎えつつあったのだ。

麻也子が健康にもどる途は、他人の腎臓を一個移植することだった。

健康な人間が妬ましかった。目眩のために家の中を這って歩く日など、幼児が立って歩く姿さえ恨めしかった。あんな幼い子でさえ歩くのに、自分は床を這っている……。妬ましいのは他人ばかりでなく、父や母や兄弟が、食器を鳴らして食事をし、排泄を円滑に行なっている姿をかぎりなく恨んだ。麻也子はこの四年間というものの、家族とは別の、味の無いものを食べなくてはならず、膀胱が空になる爽快感を味わっていなかった。

腎移植は、両親、兄弟などの健康な血縁者から片方の腎臓の提供を受けるのが好ましいとき

れている。移植者に適合する最高の条件は、一卵性双生児だが、麻也子はこの恩恵に浴していなかった。

両親は、もし麻也子に諸条件が適合してさえいれば、自分の腎臓を片方提供するといった。母は父仙次郎せんじろうの後妻であった。仙次郎の先妻は三歳の英記ひできを遺のこして病死した。仙次郎は臓器にも衰えの出始めた五十七歳だが、役立てるものなら使ってくれといい、異母兄で二十九歳の英記も提供を申し出た。彼女には弟の昭博あきひろがいる。二十歳で学生である。

腎臓は片方摘出しても、ドナーは普通の人と変わりなく生活できると、麻也子の担当医師の長友は家族に説明した。

ドナーの血液のA B O型、H L A抗原型、リンパ球混合培養などが検査され、患者の型と合っているかどうかが確認されるのだが、もしこれらが適合していた場合、素直に提供に応じられるだろうか、自分を試したのは弟の昭博だった。そのために彼は、家族の誰よりも検査に応じるのが遅れた。検査で彼が最も適合の条件を満たしているという結果が出てしまったら、断われないというのだ。

麻也子は昭博の態度を冷酷とは思わず、親族、他人を問わず本音だと受取った。だから、検査を早く受けてくれといわなかった。が、麻也子のほうの本音をいえば、実の姉弟なのだから、素直に検査に応じて、適合していれば、腎臓を片方もらいたかった。そうすれば週三回、一回当たり五時間を要する人工透析から離脱できるのだ。その時間が自分のものになる。

父も母も、そして異母兄の英記も、実弟の昭博も血液型はAだった。この初期条件は満たしていたが、検査の結果、麻也子とは合っている型の種類が少ないということで、四人ともドナ―としては失格だった。いや、四人全員が、麻也子に偽りの報告を医師に強いたような気がした。自分たちが健康な日常を送るためには二個ある腎臓のうち一個でも失くしたくなかったのではないか。家族のうちで病人は麻也子一人で沢山だったのだ。彼女に腎臓を提供したあとでもし自分が腎臓を病むことになったらどうなるかは、腎患者のいない家庭の人たちよりも痛切に受けとめているはずである。

父は、資本金二十八億七千万円、従業員約千五百人を擁する新東精工株式会社しんとうせいこうの社長である。何社かの関連企業の社長や相談役を兼務している。英記という後継者はいるとはいふものの、企業のオーナーとして健康状態は、取引金融機関や主要取引先の重要な信用度の一つである。彼が娘のためにはといえ、臓器の一部を失ったことが外部に知れたら、社長の寿命を気に掛ける者が出てくるかもしれない。

英記の場合は、まだ先のことはあるが、次期社長の地位が約束されている。そういう者に臓器の一つが欠けているのを知ったら、健康上グループ企業のトップとして、その激務に耐えられるかと気を揉む者もいることだろう。彼には一年前に結婚した妻がいる。彼は腎臓提供を承知したが、妻が反対したかもしれない。

弟の昭博はどうか。彼は学生だ。これからやりたいことがあり過ぎる年齢である。今はアメリカンフットボールに凝っている。腎臓が片方なくなったら、激しいスポーツができなくなることを憂慮したのではないか。

母の知世はどうか。彼女は元からあまり丈夫でなかった。貧血症である。病弱というほどではないが、常にからだをいとおっている。腎臓が悪いという話は直接聞いたことはないが、こういう人は自分の肉体について敏感なはずだ。娘のために片方の腎臓をとってしまったら、他の臓器にまで影響が及んで、娘がたとえ健康なからだになっても、今度は自分が寝込むことになるのを憂えるはずだ。そうなったら、妻として夫に対して充分なはたらきができなくなる。今でさえ、夫は盛りを過ぎた妻の肉体に不満を持っているだろうから、外に愛人を囲う可能性もある。

生まれつき難病にかかる不運を背負っていた娘の運命を、諦めるよりしかたないと考えそう
だ。

このように思いをめぐらすと、血縁者からの腎臓提供を当てにしていたことは、画餅に過ぎ
なかった。

「ご免なさいね、麻也子。わたしの腎臓をあげるのが一番いいと思ったのに、それができなく
て」

母はそういったものだ。

麻也子は、生きる望みを絶たれた気がした。数か月のうちに人工透析に限界がきて、尿毒症にかかり、塩分沈着によって浮腫^{むく}んだ青黒い皮膚をして、死んでしまうことだろう。

地震や、航空機、列車の事故で、瞬間にして数百人が死ぬ。こういうニュースを眼にするたびに、健康な、使える臓器が、焼けるか腐るかしてしまるのが、麻也子には恨めしいのだった。しかし、彼女にも生きる望みがまったくないわけではなかった。それは死体腎移植である。事故などで死亡を確認後、腎臓を摘出し、最も組織適合性の高い患者に移植するのが死体腎移植である。

死亡したら腎臓を提供するという人が、全国十四の腎臓バンクに登録されている。昭和六十二年十二月現在でこれを、八万五百五十三人の人工透析患者が待っているといってもいい過ぎではない。が、腎臓移植普及会が昭和五十二年から腎臓提供登録を開始して、十一年経過した現在、腎臓提供登録者からの移植を行ったと、医師側から報告のあった数は、十三例である。血縁者、あるいは提供登録をしていない人の腎臓を移植する数は年間約百例といわれている。提供登録者がもし事故などで死亡しても、死後九十分以内に摘出できる状態でないと、折角の意志も役立たないのだ。

麻也子は、人工透析治療を受けている病院で、同じ症状の患者を何人も見ていた。子供から七十代の人もいた。患者の多くは腎臓提供者を待っていた。麻也子もその一人だった。

「八年間待っているけど、このバンクの患者で移植を受けたときいたのは二人だけだった」

という話を、麻也子は四十代の女性からきかされた。

提供を登録していても、その人が八十歳まで生きてしまったら、すでに臓器は老朽していて役立たない。ドナーになり得る資格は六十歳が限度である。したがって腎患者は、若い健康なからだの持ち主が突然死亡し、九十分以内に腎臓を摘出できる状態であるのを、ひたすら待つより仕方がないのだった。

2

父は、麻也子を外国へやって、腎臓の提供を受ける途を考えているという話を母からきいた。「フィリピンへ行って、囚人の生体腎を移植するんじゃないの？」

麻也子は眉をしかめた。

新聞で、死刑囚や無期懲役囚の腎臓の片方を買って、移植に成功したという日本人の新聞記事を読んだ記憶があったからだ。

「アメリカなの。お父さまが、あちらで手づるをさがしてくれているわ」
母がそういつてから、ほぼ三か月経過した。

麻也子は、相変わらず週三回、病院で透析装置の世話になっていた。アメリカへ渡って移植手術を受けるといふ父の案はどうなったのか、その後母からもそれに関する進展はきけなかった。

腎臓移植手術を受けるためにアメリカに渡ってドナーを待ったが、エイズが怖くなって、日本へもどってきたという話を、ある患者からきいた。

母はたびたび外出するようになった。それまではどこへ出掛けるにも、どこそこを回って何時には帰宅すると、麻也子にもお手伝いの幸枝ゆきえにもこまごまと説明して出て行ったものが、帰宅時間しか告げずに出掛けるのだった。

ある日麻也子は、病院から帰ってベッドで写真集を見ていた。野鳥の本である。それまで鳥などになんの興味も湧わかなかったのだが、昨年こぞの十二月、近くの神社の森から飛んできたらしい大型の鳥がカシの木にいるのを窓から見つけた。頭から背、尾にかけて暗青灰色をしていて、尾に三、四本黒い帯があった。頬ほは青黒く、眉斑ひはんが明瞭めいりょうだった。

麻也子は、野鳥の会に入っている高校時代の同級生だった畑中弓子はたなかゆみこに電話した。

「それ、オオタカじゃないかしら？ そんなところにいるなんて信じられないけど」
弓子はそういった。

「珍しい鳥なの？」

「珍しいなんてもんじゃないわ。会にも都内でそんな報告例はめったにないんじゃないかしら」

二日後の日曜日、その弓子は、野鳥の会のメンバー五人を連れて麻也子の家へやってきた。彼女が頭痛をこらえている時だった。六人は、麻也子からその鳥を見た時のもようを細かくき